

---

# 特務支援課の日常

流離人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

特務支援課の日常

### 【Nコード】

N31420

### 【作者名】

流離人

### 【あらすじ】

ロイドたち特務支援課の日常を描いた短編集になります。

本編後のお話が主になりますので、ネタバレを多分に含みます。プレイ中のお方はご注意ください。

なお、作者はこの作品を「Arcadia」にも掲載しています。

眠れない夜は……

闇に包まれた個室の中、秘密裏に密談は交わされていた。  
いやに響く時計の秒針の音。

時折息を呑む音も聞こえ、室内の緊張は高まる一方だ。  
そんな荒んだ空気の中、語り手の少女は重い口を開き

「……そして、気づけばあたりは真っ暗になっていました。教室の  
中にただ一人取り残された少年。わずかばかり不安が芽生え始めた  
その時 ふと、窓の外に何かの気配を感じたんです。そのまま  
窓のほうを見ると……白い人影がくるくると宙を舞っていて」

「いやああああああああっ！！」

そう、特務支援課は怪談話の真っ最中なのだ。

事の発端は日曜学校から戻ったキアの一言だった。

「『あーていふあくと』ってなに？」

はじめはエリイが付き添って図書館に行ったり、テイオが導力ネツトで情報を集めたりしていただけた。しかし、ランディが伝承に登場する悪魔や怨霊の類を語り、そこにロイドがそれに便乗したことで、キアの興味がアーティファクトから心霊へと逸れてまったのだ。

数多の技術者が首を捻るアーティファクトの仕組みに比べ、やはり『霊』という存在は子供の関心をそそるようだ。それにアーティファクトの多くには霊的な言い伝えが伴うため、この流れはある意味必然ともいえる。

かくしてテイオの計らいにより、急きよ怪談が行われることになった。もちろんエリイは大反対したが、キアの上目遣いにあっさり敗北した。そして現状に至るというわけだ。

「エリイ……くるし〜」

「あっ……じゅ、ごめんなさいキアちゃん」

（……エリイ、こづいところ可愛いよなあ）

「エリイさん怖がりすぎです」

「やれやれ、どっちが子供か分かったもんじゃねえな」

無我夢中でキアを抱きしめていたエリイは、慌てて彼女を解放する。

恥ずかしそうに俯くエリイの様子を見かねて、ロイドはさりげなくフォローを入れる。

「でも、確かに怖かったな。俺もちょっと寒気がしたし」

「にしてもテイオすけ、どこでそんなネタ仕入れてきたんだ？」

「導力ネットです。その『白い影』の噂ですが、どうやら信憑性の高い情報ようです。実際にリベールで目撃者がいたようで……」

「おいおい、マジかよ！ まさか、ほんとに幽霊が」

「冗談でしょ！ ゆ、幽霊なんているはずないわ！」

「ええと、エリイ。もう少し離れてくれたほうが……いや、俺はこのままでもいいんだけど……」

断言するような力強い口調と裏腹に、ロイドの背中に隠れ震えるエリイ。本人も無意識の行動なのか、大胆と取れるほど密着している。

そんな二人の様子を楽しみつつ、ランディは大仰な仕草と共に口を開く。

「さて、よつやく俺の番が回ってきたわけだが」

「ね、ねえ！ 明日も早いし、このくらいでやめにしない？」

(当たってる！ 当たってるって！)

「ですがエリイさん、ランディさんはまだ一度も話していませんし……」

「エリイ、やっぱりゆーれいが怖いのか？」

「そんなことないのよ！ ただ、あまり遅くまで起きてると体によくないから」

「(あつ、柔らかい　じゃなくて！)　ま、まあ、エリイの言う通り今日はお開きにしないか？」

これ以上は理性が　ロイドの心の叫びが頂を奏したのか、図つたように時計の針が時刻を告げる。

午後10時。

ロイドたちは職業柄夜更かしなどざらだが、子供はとっくに寝ている時間だ。

キアのことを考えると、これ以上はエリイの言うとおり健康上良くないだろう。

「残念です。選りすぐりの情報がまだ二つほどあるのですが……」

「ん、まあ頃合っちゃ頃合か」

「もう十分よ。怪談話はこれでお終い」

心底安堵した表情でロイドから離れるエリイ。

理性と欲求の闘ぎ合いから開放されたことに安心しつつも、ロイドはつい背中に残るぬくもりの余韻に浸ってしまつ。

(危なかった……でも、ちょっと惜しかったかな……)

「……ロイドさん、なんだか残念そうですね」

「えっ……！？ べ、別にそんなことは……」

(分かる、分かるぜその気持ち！)

男ならではの下心を持ち前の感能力で察し、ティオは軽蔑の視線をロイドに送る。

しどろもどろに言い返すその様子に、心底同情するランディ。やはり男同士通じるところがあるのだろう。

「ロイドー、いつしよに寝よ〜」

「はいはい、ちゃんと歯を磨いてからな」

「キーアちゃん、久しぶりに私と寝ない？」

「ヤダ！ 今日ロイドと寝る番だもん」

「というより、エリイさんは昨日キーアと寝たばかりですよね？」

「えっ……！？ そ、そういうばそうだったわね。忘れていたわ……」

不思議そうに首を傾げるティオに、あわてて首肯するエリイ。

明らかに挙動不審な彼女の様子を見据え、ランディは意地悪く笑みを浮かべる。

「はーん。さてはお譲」

「ち、違うわよ！一人で寝るのが怖いわけじゃあっ」

(エリイさん、自爆してます)

(捜査官がこんなに軽口で大丈夫かねえ)

「エリイ、本当に大丈夫か？なんなら俺からキアに頼んでも…」

「そんなに心配しないで平気よ！もう子供じゃないんだから…」

「そ、そうか。ならいいんだけど」

(……フラグが立ちましたね)

(こりゃ面倒なことになりそうだな)

何とか取り繕うと気丈に振舞うエリイだが、傍目には脅えているのが明白だ。

そんな彼女の様子に戸惑いつつも、とiriあえず納得しておく口イド。

対して、これはひと悶着起こるに違いない、と確信に近い予感を抱く二人。

「それじゃあ、俺たちは寝ることにするよ」

「エリイもテイオも、ランディもおやすみ」

「おう、また明日な」

「おやすみなさい」

「…………おやすみなさい…………」

一足先に2階へ姿を消した二人を見送った後、残された面々も各自の部屋へ向かおうとする。

「そいじゃ、俺らもボチボチ寝るとしますかね」

「おやすみなさい、エリイさん、ランディさん」

「え、ええ…………二人ともおやすみなさい…………」

「…………エリイさん、顔色が優れないようですが、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫よ、問題ないわ」

「お嬢、怖くなったら遠慮なく来いよ。お兄さんが添い寝してやるからな」

「結構です!!」

かくして一同は適宜解散し、テイオとランディの予感は見事的中するのだった

(……ど、どうしよう。全然眠れない……)

自室のベッドで、エリイは何度目かも分からない寝返りを打つ。寝る前に飲んだホットミルクの効果は現れず、ヒツジを数えるのも1000を越えたあたりでやめてしまった。

未だに訪れる気配の無い睡魔の代わりに、恐怖と孤独感が絶え間なくエリイを襲っていた。

『そのまま窓のほうを見ると……白い人影がくるくると宙を舞っていて』

(だ、大丈夫よ……幽霊なんていない……いるはずないんだから……)

風で窓がきしむたびに、自然とテイオの言葉が反芻される。いるはずがないと理解しつつも、感情は納得してくれない。嫌でも窓のほうに意識が向いてしまい、存在しない幽霊の影におびえてしまう。

もちろん確認する勇氣など彼女には無く、部屋の電気もついたまままだ。

(もうだめ……こ、こうなったら……)

時間だけが刻一刻と過ぎ、それに伴い不安はますます募っていく。毛布に身を包みただ震えていたエリイは、現状を打開すべく最後の手段に出ることを決意めた

(こうなったら……誰かに相談するしか……)

恥も外聞も捨て去ることだ。

もう背に腹は変えられない。

一刻も早く誰かの顔を見たい。

今すぐにでも会話を交わしたい。

落ち着きたい。

安堵したい。

この恐怖から開放されたい。

この悪夢から解き放たれたい。

(ロイドはもう寝ちゃってるわよね。キアちゃんも一緒だし……)

真っ先に思い浮かんだのは、意中の人であるロイドだった。壁に突き当たるたびに、支え導いてくれた彼ならきつと助けてくれるはず。



【ロイドの部屋へ行く】

【ティオの部屋へ行く】

【ランディの部屋へ行く】

眠れない夜は…… (ランディルート)

「……ん、誰だ？」

自室で物思いにふけていたランディだが、ノックの音でドアの方に目を向ける。

「誰だ」と問いかけつつも、その正体は予想がついていた。

まずキアの世話係であるロイドは除外。ティオもこの時間まで起きてはいないだろう。ツアイトは……論外だ。

となれば、残る人物は一人しかない。

「私だけど……その、ちょっといいかしら？」

「お譲か。ちょっと待ってな」

とりあえず机に放置されていたグラビア誌を目立たない所に隠す。ついでに空の酒瓶もまとめて隅の方にのけておく。

「おう、もう入って来ていいぜ」

「……お邪魔するわ」

どこか躊躇いがちに入ってきたエリイは、普段の制服ではなく白いワンピースに身を包んでいた。

よほど不安に駆られたのか、微かに頬を染め小動物のごとき眼差

しを向けてくる。普段の凜とした彼女には到底結びつかない気弱な姿勢だ。

その表情は並みの男なら一目で恋に落ちかねないほど扇情的なものだったが、女慣れしているランディにはこれといった効果はなかった。

「そーかそーか、そんなにお兄さんに添い寝してほしかったか。意外と甘えたい盛りなんだな……」

「ち、違うわよ！ 単に寝付けなからランディの様子を見に来ただけで、別に一人でいるのが怖かったわけじゃ」

「はは、分かってるって。でもよ、なんでロイドの部屋に行かないんだ？ 『お願い、私と一緒に寝てほしいの！』とか言ってるベッドインすればアイツもイチコロだろ？」

「そ、そんなことできるわけないでしょ！ キーアちゃんもいるのよ!？」

「甘いぜお譲、世界は弱肉強食なんだ！ ロイドがどこの誰とも知らねえ女に喰われてもいいのか!？」

「バカなこと言わないで！ ロイドに限ってそんなことあるはず……でも、確かにロイドは天性の女たらしだし……」

「と、とりあえず立ち話もなんだから座れよ」

「冗談のつもりが不安を煽ってしまったようなので、ひとまず彼女に座るよう促す。」

「にしても、こんな夜中に野郎の部屋に遊びに来るとは、お譲も大胆になったなあ……………」

「し、仕方ないじゃない！ ロイドとテイオちゃんはもう寝てるだろうし……………」

「はは…………まあ、それもそうだな」

とはいったものの、これからどうしたものだろうか。

まさか本当に添い寝するわけにはいかない。エリイがロイドに思いを寄せているのは丸分かりだし、そもそも彼女は自分の好みに届いていない。

かなりのプロポーションを誇ってはいるが、色香や大胆さの方はいまひとつだ。

なにより彼女には遊び心が足りない。あれではロイドも将来大変だろう。

「やっぱり尻に敷かれるんだろうなあ……………」

「……………なんの話？」

「ああ、なんでもねえ」

とりあえず飲み物を用意しようと思った直後、隅の方に追いやった酒瓶が頭をよぎる。

「……………そうか、その手があった……………」

「え……………？」

「眠れない時は、やっぱりコイツに限るよな！」

そう言っただけでランディが取り出したのは、彼のコレクションの中でも秘蔵の銘酒だった。

頃合いを見てロイドとの祝杯に使ったつもりだったが、これはこれで面白くなりそうだ。

次いで2丁のワイングラスも用意するが、エリイは呆れたようにジト目でこちらを睨んで来る。

「ちょっと、それワインじゃない」

「そうだけど……なにか問題あるか？」

「大ありよ。明日も朝から仕事なのに、こんな時間にお酒なんて駄目に決まって」

そこまで言いかけて、エリイは思わず言葉を失った。

「うそ……これ、グラン・シャリネ よね？ どうしてランディが持つてるのよ！？」

グラン・シャリネ。

リベール王国で醸造された銘柄のワイン。かつてオークションにて50万ミラの値がついた超高級品だ。

「よくぞ聞いてくれました！ これこそ、俺の汗と涙と努力の結晶……」

「はぐらかさないの！ 私たちの給料じゃ1年働いても買えないわ

よ。リベール国内でも入手は困難なのに……」

「その辺はクロスベルの成せる業ってとこだな」

「……なんだか怪しいわね。もしかして違法ルートから輸入された粗悪品じゃ……」

(……ギクツ！)

実は 黒の競売会シユバルツオークション の際にこっそり入手したのだが、もちろん真相は明かさない。

なにしろガルシアとの戦闘の際も苦勞して死守した1本なのだ。没収でもされてはたまらない、なんとかして誤魔化さなければ。

「まあ、お嬢が酒嫌いならしょうがないな。今度ロイドでも誘って飲むとするか」

「……べ、別に嫌いとは言っていないわ。ただ、こんな遅くに飲むのは体によくないから……」

「あつ、普通の飲み物もあるから安心しな。何がいい、お嬢？」

「……………」

適当に棚を探りつつ、チラリと背後を振り返る。案の定、エリイは苦渋の表情で肩を震わしていた。

そこでランディは大仰に酒瓶を掲げ、誘惑の言葉を投げかける。

「……ホントはお嬢だって飲みたいんだろ？ 50万の値が付く高級品だしな」

「うつ……それはそうだけど……」

ゴクリ、と彼女が喉を鳴らすのが分かる。  
あと一押し、といったところか。

「だいたいお嬢はカタすぎんだよ。たまには肩の力を抜かなきゃ息が詰まるぜ」

「でも、早く寝ないと明日の任務に差し支えるし……」

「そのための寢酒だろ。これはあくまでお嬢の安眠のためなんだ。何か問題あるか？」

「それは……」

俯いて黙り込んでしまうエリイだったが、数分もしないうちに顔を上げて

「……そ、そうよね。仕方ないわよね。それじゃあ、ちょっとだけ頂こうかしら……」

思わず内心でガッツポーズを決める。彼女のような生真面目な女性が酔うところを一度見たかったのだ。

さっそくとばかりに酒瓶を傾け、澄んだ色の液体をグラスに注ぐ。漂ってくる芳醇な香りは粗悪品のものでは決してない。どれほど酒に疎い者でも一級品と判断できるだろう。

「そんじゃ、乾杯といきますか」

互いにグラスを打ち鳴らし、匂いに促されるまま一気に飲み干す。

「うめえ！」

「……美味しい……」

濃厚で強烈、それでいてしつこすぎることなく爽快な味わい。

巷で美酒とされる数多の代物もこれと比べれば霞んでしまっただろ  
う。

いや、比べることすらおこがましいと言っても過言ではない。

「こりやすげえ！ 50万の値がつくだけはあるな……お譲、もう  
一杯いっとくか？」

「え、ええ。頂くわ……」

どうやら彼女もまた、すっかりこの美酒の虜になったようだ。

しかもその華奢な体躯に反して中々の飲みっぷり。このペースで  
行けば割と早く酔いつぶれるだろう。

あとは美酒を存分に堪能しつつ、彼女の酔った様を拝見するとし  
よう。

(さして、お嬢がどうなるか見ものだな……)

【実は酒癖が悪かった】 Aルートへ

【実は酒豪だった】 Bルートへ

【Aルート】

「なんでいつつも肝心なところで鈍いのよ！ ロイドのバカ！ 節操無し！ フラグ製造機！！」

「お、お嬢、ひとまず落ち着こっぜ。な？」

「セシルさんの前ではいつつもデレデレしちゃって……そんなに巨

乳が好きなの！？ 胸なら私だって負けてないでしょ！！」

(ダメだこりゃ……かなり悪酔いしてやがる……)

ここに至って、ランディはようやく己の浅はかさに気づいた。同時に楽観的な幻想を抱いていた過去の自分を呪った

エリイが愚痴りだしてから早くも2時間。それも普段の彼女なら間違っても口にしないであろう大胆発言の連発だ。まさかこれほど酒癖が悪いとは。

「いや、セシルさんとは昔から知り合いだったみたいだし、あれは『恋人』ってのとは違うだろ？」

なんとか宥め賺そうと試みるも、彼女はより悲しげに目を伏せ

「……そう、やっぱりナース服が鍵だったのね……」

「なんでそうなるんだよ……」

まるで聞いていないようだ。

「あの二人は『恋人』というより『姉弟』で」

「そ、そんな……ロイドが今では希少な姉属性だなんて!？」

「だからなんでそうなるんだよ!」

「日曜学校で出会えなかったのがいけなかったんだわ！ 幼馴染になつてさえいれば、今頃はきつと」

「話し聞けよ！」

ついカツとなつて、らしくもない大声を出してしまう。

隣の部屋に聞こえていないかも心配だったが、目の前のエリイはもつと心配だ。このまま妄想が続けば何をしでかすか分からない。

虚ろな瞳で上を仰いでいた彼女だが、ランディの怒鳴り声でようやく彼のほうを向く。

「……ランディには分からないわよ。女の子たちとは遊び放題の遊び放題、来る日も来る日も酒池肉林。おまけにミレイユ准将とはフラグまで立てちゃって……」

「人聞きの悪いこと言うなよ！ だいたい俺とミレイユはそんなんじゃない……」

「うるさいわね！ ロイドの兄貴ポジションを占拠したくらいで調子に乗らないで！ なにが 闘神の息子（笑） よ！」

「お嬢、その呼び方はやめ……って、すごい馬鹿にされた気がするぞ！？」

割と本気でダメージを受けたランディをよそに、エリイは尚も酒を呷る。

それも瓶に直接口をつけての一気飲み、酒飲みの巨漢にも劣らぬ豪快さだ。ワイングラスは数刻前からただの置物と化していた。

「待て待て！ もうその辺でやめとけ！」

「放っておいて！ 私にはこれしか……もうこれしかないの！」

「いや、これ以上は本当にヤバいから お嬢！？」

途端、エリイの上半体がグラリと傾き、その手から酒瓶が滑り落ちる。

砕け散った破片が辺りに飛散し、それに続くように彼女の体も地面へ倒れこみ

「あぶねえ！」

すんでのところ、ランディがエリイを抱きかかえる。

「おい！ 大丈夫かお嬢」

「……ランディ……」

ランディの胸に抱かれたまま、エリイは上目遣いで彼を見つめる。助けるためやむを得なかったとはいえ、自然と抱き合う格好になっ

てしまった。互いの息が届くほどの距離で、彼女の潤んだ瞳が自分を捉える。

「お、お嬢……」

微かに紅潮した頬。

熱を帯びた視線。

粗い息遣い。

妖艶な表情。

ドキリ、と心臓が警鐘を鳴らす。

今の彼女は危険だ。

欠けていた『色香』を補ったわれたことで女性の極致に達している。

しかも普段とのギャップも破壊力に拍車をかけている。

（お、落ちつけ俺！ 相手はあのお嬢なんだぞ？ 俺の好みはもつと大人でグラマーな……）

必死で自分に言い聞かせている間にも、エリイは更に力を込めて密着してくる。

いつもなら軽く受け流せるはずが、混乱の余りまともな判断が下せない。

ついには思考停止寸前にまで陥ったランディだが、思わぬ形で救いの手はもたらされた。

「……ごめん、もう無理」

「……へっ？」

途端、赤く染まっていたエリイの顔がみるみる青ざめて

「うえええええ……」

「ぎゃあああああ！？ 俺の一張羅があああああああああ！……！」

「…………お、おはよう…………ティオちゃん」

「おはようございます、エリイさん…………とても顔色が悪いようですが、大丈夫でしょうか？」

「実は昨日のことがよく思い出せないの。なかなか寝付けなくて困ってたはずなんだけど…………」

「…………本当に大丈夫ですか？ まさか、記憶障害や脳障害の類では…………」

「そ、そんなに深刻なものじゃないのよ。ただ、ちょっと頭が痛むのと眩暈がするだけで…………」

「風邪でしょうか？ 念のために回復系のアーツをかけておきますね」

「うん、ありがとう」

そんな二人のやり取りを小耳にはさみ、ロイドは机に突っ伏して

いるランディに話しかける。

「ランディ、なんだか元気がないみたいだけど何かあった？」

「ああ、昨日なかなか寝付けなくてな……俺はもう疲れたぜ」

あの後、ランディは酔いつぶれたエリイを解放したり、彼女の部屋まで運んだりと後始末に追われることになった

コレクシヨンの酒は好き放題飲まれるわ、一張羅は汚されるわでとんだ骨折り損になってしまった。

そしてなにより

(一瞬とはいえ、お嬢に心を奪われるとは……)

悪夢だった。

自分より3つも年下、しかもあのお嬢に見惚れてしまった。

思い出すだけでも自己嫌悪に陥ってしまう。

この忌まわしき記憶を即刻破棄たかつたが、恐らく未来永劫忘れ去ることはできないだろう。

ロイドと顔を合わせるのも鬱屈だったため、うつ伏せになったまま掠れた声を絞り出す。

「すまん、ロイド。朝食の準備はお前に任せた」

「ラ、ランディ!?　　しっかり!」

君子危つきに近寄らず。

もう二度とエリイを酒に誘うまいと固く誓ったランディだった。

【B  
ル  
ー  
ト  
】

「おいしい！ 柔らかい舌触りに、絶妙な甘さと辛さのバランス…  
…これは癖になるわ」

「……………まだ飲むのかよ……………」

ここに至って、ランディはようやく己の浅はかさに気づいた。同時に楽観的な幻想を抱いていた過去の自分を呪った。

自分は意識を保つだけで精一杯なのに、彼女は今なお笑顔でグラスを傾けている。まさかこれほどの酒豪だったとは。

グラン・シャリネ はとつくに底を尽き、テーブルには空の酒瓶が乱立している。

めまいと吐き気を必死にこらえるランディの様子は気にも留めず、エリイは エル・ヴォワール ランディのコレクションの中ではかなりの上物 を存分に堪能していた。

「……………お嬢……………もうやめにしないか……………」

「あつ、ごめんなさい。いまランディの分も注いじゃうから」

「……………か、勘弁してくれ……………」

ランディの主張を聞いているのかいないのか、エリイは喜色の笑みを浮かべ、彼のグラスになみなみとワインを注ぐ。

自他共に認める酒好きのランディだが、初めて目の前の赤い液体に嫌悪を抱いた。これが何杯目なのか想像するのも鬱屈だ。

朦朧とした意識でグラスを傾け、強引に中身を喉奥へ流し込む。味も香りも一切感じず、胸のむかつきが増したただけだった。

「そろそろ寝ないと……これ以上は明日の任務に差し支え……」

「なに言ってるのよ。たったこれだけで終わりにするつもりなの？」

必死に搾り出した訴えも満悦の笑顔で両断される。

開始からおよそ2時間、狂宴の終わりは未だに見えず。

「ところで……前から気になってたんだけど、ミレイユ准将とはどういう関係なの？」

「ちょっと待て……なんでアイツの名前が……」

「だって、昔の知り合いみたいだし、いつも親しそうよね。IBCの時も本気で怒っていたじゃない」

「隠すも何も、ミレイユはただの元同僚……」

「ほら、そうやって名前で呼び合うところが妖しいのよ……そういえば、こうしてランディと二人で話すのは初めてね。ふふっ、こうなったら洗いざらい吐いてもらっわ」

なにやら不吉な台詞を残し、彼女は新たな獲物を物色し始める。

気づけば エル・ヴォワール は空になっていた。  
まだ一杯しか飲んでなかったのに……  
しかも味も香りも曖昧なまま……

「……うん、次はこれがいいわね」

そして彼女が選び抜いたのは

「……ま……マジかよ……」

アマル・スピリタス

アルコール度数は脅威の96%。

戦闘不能に陥った者の意識さえ呼び覚ます薬酒。

「うん、おいしいわ。これならランディもきつと元気になれるわね」

大層ご満悦の様子で微笑むエリイ。

その笑顔は女神を思わせる美しさだが、ランディには悪魔が微笑んでいるようにしか見えなかった。

「た、頼む……もう許して……」

「ダメよ。女性をお酒の席に誘ったのだから、最後まで付き合っつのは当然でしょう?」

混濁する意識の中、目の前の悪魔はその唇を妖艶に歪め

「ふふっ、今夜は寝かさないんだから」

「おはよう、ティオちゃん」

「おはようございます、エリイさん……なんだかすごく元気なようですが、昨日は良く眠れましたか？」

「ええ、ぐっすり眠れたわ。おかげですごく調子がいいの」

昨日の様子からして、しばらく寝付けないだろうと危惧していたが、どうやら杞憂だったようだ。

怪談の発案者である彼女は、エリイの様子に安堵の息を吐く。

「……そういえば、ロイドはどうしたの？ 今日ランディと朝食当番のはずだけれど……」

「ランディさんを起こしに行きました。いつもは早起きのはずですが」

途端、強烈な異臭を感じてティオは思わず言葉に詰まる。

「ランディ、いったい何があったのさ？」

「……すまん……ロイド……俺はもう駄目だ……」

臭いの元をたどると、ランディが疲労困憊の様子でロイドに肩を借りていた。

両の瞳はどこか虚ろで、その表情からは完全に生気が失せている。普段の飄々とした態度は微塵も感じられない。

そこでようやく、ティオは彼から漂う激臭の正体に気づく。

「ランディさん、すごくお酒臭いです」

「まったく……たったあれだけで酔いつぶれるなんて情けないわね……」

「……？」

「な、なんでもないわ。こっちの話だから」

そしてエリイはそのままランディの方に駆け寄り、彼にだけ聞かせるようこっそり耳打ちする。

「昨日は本当にありがとう。おかげでよく眠れたわ」

「……そうか、そりゃよかった……」

「かろうじて顔を上げ返事をするランディ。」

その一言で、いくらか頭痛が軽くなった気がした。

「どうやら昨日の酒宴は全くの骨折り損でもなかったようだ。つい顔をほころばせる彼だったが」

「だから、また グラン・シャリネ を仕入れておいてね」

（ ガクッ ）

2秒と経たずに絶望の淵に立たされることになった。

「ランディさん？」

「ラ、ランディ！？ しっかり！！」

触らぬ神に祟りなし。

もう二度とエリィを酒に誘うまいと固く誓ったランディだった。

眠れない夜は…… (ランディルート) (後書き)

作者は全てのサブイベントに目を通したわけではないので、エリイは酒に強いor弱いという公式設定がありましたら自分の勉強不足です。大変申し訳ありません。  
次回はティオルート予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3142o/>

---

特務支援課の日常

2011年3月14日17時54分発行